

令和元年度 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

希望に満ち溢れた明るい未来を「想像」し、そのような未来の「創造」に向けて、探究的にアプローチできる資質・能力を備える子どもたちの育成に向けた新教科「未来そうぞう科」を核とする教育課程に関する研究開発

2 研究開発の概要

これからの社会において直面する様々な課題に対して、人々は主体的かつ協働的に、人、社会、環境など様々な視点でアプローチし続けていくことが必要である。これはどんな状況においても希望を見出し、みんなにとってよりよい未来の構築へとつながると考える。本研究においてはよりよい未来を「想像」する、よりよい未来を「創造」という二つの意味を兼ね備えた「未来そうぞう」を主題とした新教科「未来そうぞう科」を創設するとともに、「各教科における『未来そうぞう』」において、各教科においても「未来そうぞう」をテーマに学習を展開する。そして、どんな状況においても、共によりよい未来をそうぞう（想像・創造）しようと、「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」を発揮し、自分、集団、社会・自然などに対して、多角・多面的にアプローチし続けることができる子どもを育てることを目的とし、その教育課程に関する研究開発を行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

今の世の中は、科学技術が日増しに進歩し、社会構造も急速な変化が進み、未来に対して見通しを持ちにくい時代となっていると考えられる。そのような時代を生きていく子どもたちが未来に対して、希望を持って強く生き抜くことができるのか。考えた結果、どんな状況においても、希望をもって自ら行動し、みんなでよりよい未来をつくろうと、あきらめずそうぞう（想像・創造）し続けられれば、よりよい未来をつくっていくことができるのではないだろうかという考えに至った。自分が置かれている状況に関わらず、その中で希望をもち、よりよい未来を求めて自ら行動を起こすことができる、人と共に協働してよりよい未来をつくることのできる、そのような過程に意味や価値を見出し続けることができる。そんな力があれば、先の見えない未来においても、従来、評価されてきた資質・能力に加えて新たに資質・能力を発揮して、自分自身で道を切り開き、前を向いて生きていくことができるであろう。そこで、そのような「未来を『そうぞう』することのできる子ども」を育もうと、「未来を『そうぞう』する子どもの育成」を主題として、研究開発を進めることとした。

【未来を『そうぞう』する子ども】

どんな状況においても、共によりよい未来をそうぞう（想像・創造）しようと、「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」を発揮し、自分、集団、社会・自然などに対して、多角的・多面的にアプローチし続けることができる子ども

また、今後の世の中を生き抜いていく子どもたちには、未来に対して見通しを持つことができ、社会の変化に対応することができる資質・能力を身に付けることが望まれる。育成すべき資質・能力については、文部科学省における教育課程企画特別部会において、「何を理解しているか、何ができるか（知識・技能）」「理解していること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」「どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」という三つの柱で整理しており、教育課程にはこれら三つをバランスよくふくらませながら、子どもたちが大きく成長していけるようにする役割が期待されているとしている。これより、今日の教育課程編成にあたっては、「人間の全体的な資質・能力」の育成を基盤としなければならないと考えられる。そこで本校においても、この

「主体的実践力」「協働的実践力」「そぞう的実践力」という3つの資質・能力の育成をふまえて研究を進めていきたい。

これをふまえ、本研究では、新教科「未来そぞう科」と「各教科における『未来そぞう』」という教育課程において「未来を『そぞう』する子ども」の育成をしたい。新教科「未来そぞう科」の対象については、A領域「自分自身」B領域「集団や人間関係」C領域「社会や自然」の3つの視点で学習展開を行うことで、様々な視点を持つことが可能になり、「みんなにとってよりよい未来」のそぞうについて考えを深めることができると考えられる。

また、「主体的実践力」「協働的実践力」「そぞう的実践力」という3つの資質・能力を育成するためには、本研究における学習展開の妥当性を把握しながら、実際に子どもたちの資質・能力が高まっているかを見取っていくことが必要であると考えられる。そこで、本研究では特別な教科として、現状の評価方法をそのまま活用するのではなく、未来そぞう科の3つの資質・能力を見取るために適切な評価の観点や方法を明らかにすることが必要とされる。その評価活動をその後の学習展開へと生かすことで、より充実した学習になるようにしていきたい。以上をふまえて、本校の研究の仮説を以下のように定めることにする。

【3つの研究仮説】

- ①新教科「未来そぞう科」の学習指導要領を作成することにより、学校全体で系統性をもって学習内容を進めることができ、より一層3つの資質・能力の高まりをめざすことができる。
- ②特別な教科「未来そぞう科」として、評価の観点と具体的な評価方法を明らかにし、実施することで、新教科「未来そぞう科」における3つの資質・能力をより一層豊かに育むことができる。
- ③既存の教科においても「そぞう的実践力」を発揮する姿をめざすことで、3つの実践力を高めることができる。

（2）必要となる教育課程の特例

「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の全授業時間を新教科「未来そぞう科」に充てる。

1）学校教育法施行規則50条【教育課程の編成】

本校が取り組もうとする教科	現行の法規による教科・領域
・教科…国語・社会・算数・理科・音楽 図画工作・家庭・体育 ※道徳・外国語活動 ・新教科…未来そぞう	・教科…国語・社会・算数・理科・生活 音楽・図画工作・家庭・体育 ・道徳 ・特別活動 ・総合的な学習の時間 ・外国語活動

※道徳と外国語活動においては、令和2年度より新教科等として創設されるため、本校においては、例外的に教科として位置付けるものとする。

2）学校教育法施行規則51条【授業時数】

本校が取り組もうとする授業時数							現行の法規による授業時数						
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
未来そぞう	136	140	105	105	105	105	生活科	102	105	0	0	0	0
道徳	34	35	35	35	35	35	総合的な学習の時間	0	0	70	70	70	70
外国語活動	0	0	0	0	35	35	特別活動	34	35	35	35	35	35
教科	680	735	805	840	805	805	道徳	34	35	35	35	35	35
							外国語活動	0	0	0	0	35	35
							教科	782	840	805	840	805	805

3）教育課程の特例の必要性

本研究で新設する「未来そぞう科」は、1年生から6年生までの一貫カリキュラムを目指すものであり、従来の生活科と総合的な学習の時間、特別活動の学習内容や学習目標を基盤とした教科とするものである。これにより、「未来そぞう科」は、生活科・総合的な学習の時間の70～105時間、特別活動における学級活動の時間の35時間を合わせて、105～140時間を充てることにする。

4 研究開発の内容

(1) 教育課程の内容

本研究は、「未来そうぞう」という主題に向けて、「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」という資質・能力の育成を目的とし、そのための教育課程及び教育方法、評価等についての研究開発を行うものである。以下に、「資質・能力」「教育内容」「評価方法」の視点から、本校が研究開発学校として着目する内容について示すことにする。

1) 未来を『そうぞう』する子どもに必要となる3つの資質・能力

「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な資質・能力を「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」の3つ、設定した。

【未来を『そうぞう』する子どもに必要となる3つの資質・能力】

主体的実践力……対象に対して主体的、自律的にアプローチすることができる力

協働的実践力……多様な集団の中においても、積極的に関わり協働的にアプローチすることができる力

そうぞう的実践力……よりよい未来をつくるために、アプローチし続ける中で、新たに意味や価値を見出すことができる力

本校では、50年以上にわたって同じ学校教育目標「ひとりで考え ひとと考える 最後までやりぬく子」を基軸として、「未来に向かって力強く生きていく豊かな人間性」を育むことを重視してきた。この学校教育目標における「ひとりで考え」は知的好奇心に基づく「主体性」、「ひとと考える」は支え合う「協調性」、「最後までやりぬく」は自己実現に向かう「創造性」を指すものである。この本校における取り組みを基盤とし、これらを実践する力を確実に育むことによって、「未来を『そうぞう』する子ども」を育成することができるのではないかと。そこで、それぞれ「主体性」「協調性」「創造性」を実践することのできる力を「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」とし、学校教育全体において育成しようと考えた。

3つの資質・能力の関係性については、図2に示す通りである。子どもたちは対象にアプローチする時に、主体的、自律的に考えたり行動したりする。他者と協力することでその考えや行動はより広がり、深まる。考えや行動に新たに意味や価値を見出すことは対象の未来をよりよいものへとつくり変え続けることである。この一連の営みの中で主体的実践力と協働的実践力が両輪となって発揮されることによってそうぞう的実践力が育成できると考えられる。

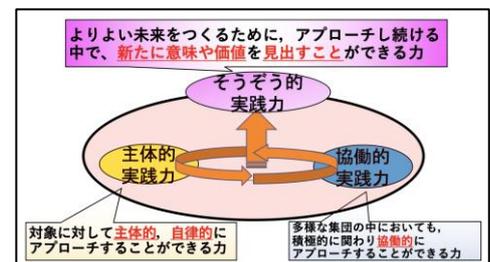


図2 3つの資質・能力の関係性

2) 教育内容

① “未来を『そうぞう』する子ども”に向けての構想

本研究では、「未来を『そうぞう』する子ども」の育成に向けて、学校教育全体で三つの資質・能力を育むために、新しく新教科「未来そうぞう科」及び「※各教科における『未来そうぞう』」を設定した(図3)。「そうぞう」には、よりよい未来を「想像」する、よりよい未来を「創造」するという両方の意味を兼ね備えている。とりわけ3つの資質・能力を育むことに特化した新教科

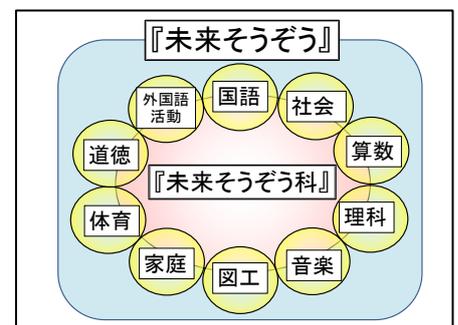


図3 各教科と「未来そうぞう科」の構想図

「未来そうぞう科」では、自分、他者、社会・自然を学びの対象として、子ども自身が問いをもち、協働的に活動しながら、様々な方法で解決活動を行う。未来そうぞう科は、本研究の教育課程の中で、中核を担うものである。未来そうぞう科を中核に据え、各教科も含め、「未来を『そうぞう』する子ども」の育成をめざすこととする。 ※道徳と外国語活動においては、令和2年より新教科等として創設されるため、本校においては、例外的に教科として位置付けるものとする。

② 「イメージ・クリエイト」

子どもは、「イメージ（想像）」と「クリエイト（創造）」を繰り返しながら対象に対して向き合っていく。子どもたちは学びの対象と向き合う中で現状がよりのぞましいものへと変容することを思い描き、新しく行動をおこしたり、立ち止まったりする。このような一連の営みは「未来そうぞう科」だけではなく、既存の教科においても行われると考える。イメージ・クリエイトは互いに往還しながらも、より広がり、深まりのある「イメージ」がより具体的な「クリエイト」につながり、その「クリエイト」がさらなる広がり、深まりのある「イメージ」へとつながっていく。このように「イメージ」と「クリエイト」の質を高めながら「未来を『そうぞう』する子ども」をめざして進んでいく。

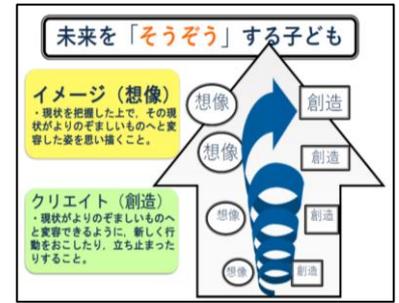


図4 「イメージ・クリエイト」

③ 新教科「未来そうぞう科」とは

新教科「未来そうぞう科」とは、「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」という資質・能力を6年間かけて育成することを目標として、1～6年生を対象に設定した新教科である。これは、現学習指導要領の「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の時間を合わせて設定している。基本的には、従前の「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の時間の学習内容を基盤としたものである。ただし、「生活科」において9つの内容が定められているが、現状の「総合的な学習の時間」には内容の取り扱いは書かれているが系統的に示されていないことや、「特別活動」における「学級活動」においても学習内容は示されているものの、具体的な学習展開については十分に示されていないことをふまえ、新教科「未来そうぞう科」では、統合的なカリキュラムとして学習内容の具体的な視点を「教科」として示していく。

④ 未来そうぞう科の目標

【未来そうぞう科の目標】

「自分自身」「集団・人間関係」「社会・自然」に対して実践的・体験的な活動を通して、未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて、どんな状況においても希望をもち、共によりよい未来をそうぞうしようとするための「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」を育成することを旨とする。

- ・「自分自身」「集団・人間関係」「社会・自然」に対して実践的・体験的な活動を通して「自分自身」「集団・人間関係」「社会・自然」とは「未来そうぞう科」の3つの領域である。

表1 学習テーマの視点

A 自分自身

自分自身を知ることで、希望をもって生きていく自分自身の将来の姿を「想像」し、そのイメージを実現し「よりよい未来」を「創造」するためにはどのように生きていくことが望ましいのか、自分自身に深く、広くアプローチすることができる学習展開を行う。

B 集団や人間関係

多様な集団との関わりの中で、人の気持ちを「想像」し、人との関わりを深めることが「よりよい未来」の「創造」へとつながっていくということを実感でき人間関係形成につながるように、人と人との関わり方にアプローチすることができる学習展開を行う。

C 社会や自然

自分を取り巻く「社会」や「自然」について「自分事」ととらえ、社会や「自然」の「よりよい未来」の「創造」に向けて、それらに対して自分なりにできることを「想像」し、社会や自然にアプローチすることができる学習展開を行う。

A領域は自分自身の「好きなこと」を追求していく中で、自分自身を深めていく。さらに教師や保護者、友だちなどに関わることで、新たな自分に気づき、自分自身を広げていく。B領域はクラス、学年、異学年、特別支援学校や幼稚園の集団を学びの対象とする。学びの対象である集団が変化する中で、子どもがそれぞれの立場や関わり方を変化させていく。C領域は身近な自然や生命、地域や現代の社会や環境における諸問題などを学びの対象にしている。その中で関わる社会・自然を広げていく。その対象に対して、子ども自ら問いをもち、解決していく。

表2 未来そうぞう科の対象例

A領域：自分自身	B領域：集団や人間関係	C領域：社会や自然
好きなこと・得意なこと 様々な生き方・考え方との出会い 自分の生き方・考え方	学級・学年 隣接学年 隣接校園 (幼稚園 保育所 特別支援学校 中学校等)	校庭 学校 地域 日本 世界 地球 宇宙
	(異学年 縦割り活動)	自分・家族・ 学級・学年・ 動物・植物・ 暮らし・防災・ 情報・科学技術 環境・国際理解 伝統・文化・ 健康・福祉 など

これまでの未来そうぞう科の実践を踏まえ、領域別にまとめたものが、表2の未来そうぞう科の対象例である。ABCの領域はそれぞれに独立して働くものではなく、互いに働きかけたり、働きかけられたりする。

さらには、既存の教科も含めて、一体的に補い合って高まっていく活動であると考えている。そして全ての対象を網羅するものではなく、子どもの実態・学校環境等によって変わるものである。子どもの思いや願いにそった柔軟なカリキュラムを目指す。

実践的・体験的な活動とは未来そうぞう科の学習活動であり、子どもが活動を通して、学ぶ教科であるということを示している。

・未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて

ここでは、未来そうぞう科において、どのような視点で対象を捉えどのような考え方で思考していくのかという対象を捉える視点や考え方を示す。未来そうぞう科の見方・考え方とは『**イメージ・クリエイトの往還**を通して、**多角的・多面的にアプローチし、過去・現在・未来と関連付けながら**、よりよい未来の実現を目指そうとすること』である。

「**イメージ・クリエイトの往還**」とは子どもたちは学びの対象と向き合う中で現状がよりのぞましいものへと変容することを思い描き、新たに行動をおこしたり、立ち止まったりすることを繰り返すことである。「**多角的・多面的にアプローチし**」とは対象を一面的に捉えるのではなく、子ども自らの過去の経験や各教科等で身につけた既存の知識や技能、友だちの考えなどを基に様々な視点で対象にアプローチしていくこと。そして対象にアプローチすることによって得られた経験を蓄積していくことで、対象を改めて捉え直し再び対象にアプローチしていくことである。多角的・多面的な視点で対象にアプローチすることにより方向性をもって「**イメージ・クリエイト**」が往還される。「**過去・現在・未来と関連付けながら**」とは子どもたちの時間軸を表し、対象を過去の経験と関連付けたり、現在の現状把握に努めたりして、対象がより望ましい未来に近づくために今、何ができるかを考えることである。ただし子どもによって、未来を見通す空間や時間軸は異なる。その点を踏まえながら、領域ごとにおけるよりよい未来の本質的な課題を明確にすることが大切である。

・どんな状況においても希望をもち、共によりよい未来をそうぞうしようとする。

未来そうぞう科における目指す子どもの姿である。未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて対象にアプローチすることにより、方向性をもって「**イメージ・クリエイト**」が往還され、子どもの主体的実践力や協働の実践力が両輪となって発揮され、対象に新たに意味や価値を見出すことができる力（**そうぞうの実践力**）が育成できると考える。

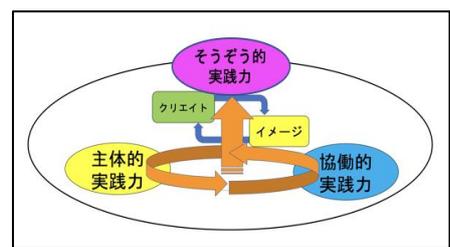


図5 三つの資質・能力とイメージ・クリエイトの関係性

⑤ 未来そうぞう科の評価

未来そうぞう科の評価は一人ひとりの資質・能力向上に向けての評価であり、現状の子どもが出来不出来を決定づけるためのものではない。単元のねらいとする目標を明らかにして、教師が手立てを考える。その目標に対する実際の子どもを考えや姿を見取る。教師自身が自分の授業を振り返り、子ども一人ひとりの考えや姿に価値を見出す。そして、その子のよりよい成長に向けて、指導計画の見直しや教師の手立てを考える。

表3 そうぞうの実践力の評価の観点

教師側の観点	①イメージ力	②クリエイト力	③レジリエンス※
子ども側の観点	①考えてみる	②やってみる	③最後までやりぬく

教師と子どもは1つの授業において、表3の観点を共有した上で、課題解決に向けて活動しながらも時には立ち止まり、今をふりかえり、過去を省みて、未来に思いをはせる。この一連の営みは、図6のように授業内における学習者を主体としたポートフォリオを用いた自己評価をベースにしながら、より自己をメタ認知できるように、指導者だけでなく、児童、保護者、ゲストティーチャーからの評価も取り入れる対話型評価や過去の経験や現在の経験をもとに時には立ち止まり、先を見通したり、対象を捉え直したりする場として、「未来タイム」を設定して、評価を行う。この評価の観点は教師だけではなく、子どもと共有することで、子どもが自分自身を自己評価することが可能となる。

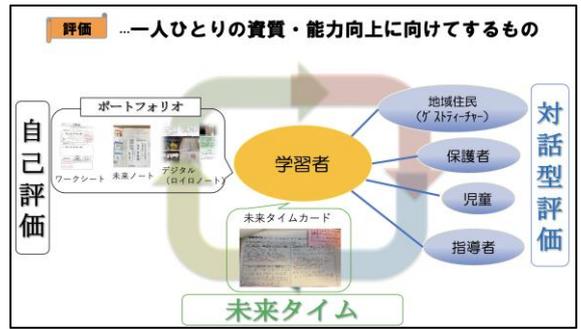


図6 学習者を主体とした評価の方法

⑥ 「各教科における『未来そうぞう』」

本研究を進めるにあたって、各教科においては、現行の学習指導要領に沿って従来通りそれぞれの教科でつけたい力をねらい、学習を進めていくと同時に、本研究でねらう「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」の3つの資質・能力の育成にも取り組んでいる。各教科の特性を發揮し、未来を「そうぞう」する子どもの育成に向けて各教科が担う部分を焦点化し、検証することで本研究がめざしている3つの資質・能力がより豊かに育むことが可能になるのではないかと考える。

未来そうぞう科は、本研究の教育課程の中で、中核を担うものである。未来そうぞう科を中核に据え、各教科も含め、“未来を『そうぞう』する子ども”の教育課程を編成する。本研究を進めるにあたって、各教科においては、次期学習指導要領の資質・能力をねらい、学習を進めていくと同時に、「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」の3つの実践力の育成にも取り組んできた。4年間の研究により、3つの実践力を高めやすい各教科の特性が明らかとなった。

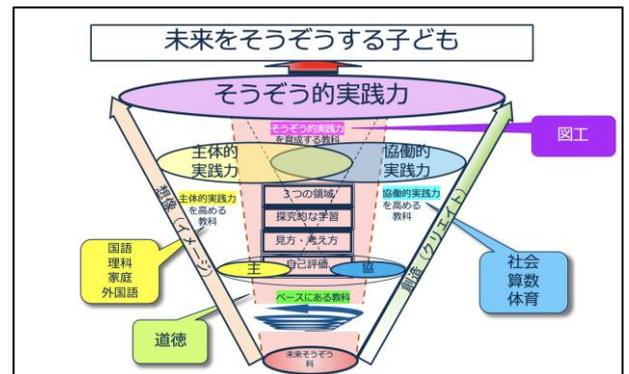


図7 “未来を『そうぞう』する子ども”に向けての全体構想図

各教科は図7の「“未来を『そうぞう』する子ども”に向けての全体構想図」の中のどのような位置であるのかを明らかにして、研究を進めていく。さらに各教科においても、次期学習指導要領の資質・能力を育成しつつ、学習を進めていくと同時に、6年間をかけて、「そうぞう的実践力」を發揮した姿を想定して研究を進める。

⑦ 授業時間等について未来そうぞうモジュールの設置の工夫

新教科「未来そうぞう科」の一部を毎朝8:40～8:55に、一週間の帯の時間であるモジュールタイム行うことにする。毎日の15分間に、「未来そうぞう科」の活動に伴う見通しやふりかえりなどの機会を継続的に持つことで、アクティブな思考活動ができるようにしていく。「次の活動の時間には、○○○という活動がしたい」「○○○の活動の中では、自分は○○をやりとげるんだ」などのように、未来を「想像（イメージ）」できる場とする。

表5 本校の授業時程

		月	火	水	木	金
朝の会	8:30～8:40	全校朝会		学年朝会		
	8:40～8:55	未来そうぞうモジュール				
1	8:55～9:40					

(2) 研究の経過及び評価に関する取り組み

項目	第1年次（平成28年）	第2年次（平成29年）
研究の経過	<p>① 研究組織</p> <p>管理職と研究活動部で構成される「研究戦略会」、教職員全体で研究の方向性を検討する「研究会全体会」、各教科主任が各教科について検討する「教科主任会」、未来そうぞう科について検討する「未来担当者会」、各教科・領域ごとに検討する「教科部会」、複数の教科部会から構成される「G教」などによって構成されている。</p>	<p>各学年1人ずつで構成された「未来担当者会」のかわりに、新たに「未来そうぞう3分会」を組織化した。資質・能力表やカリキュラムにおける系統性や発達段階を踏まえた内容の検討などを行う。</p> <p>校内における公開授業において、未来そうぞう科を中心に（6実践）、研究を進める。</p>
	<p>② 未来そうぞう科</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究開発学校の先行研究調査 6カ年に及ぶカリキュラム（目標・内容等）の試案・検討・作成・実践（合計18実践） 実践をもとに教科書を作成 未来モジュールにおいて、未来ノートを記述 学びのプロセスの具現化 	<ul style="list-style-type: none"> 未来をそうぞうする子ども像の改訂 未来そうぞう科の見方・考え方の作成 系統的なカリキュラムづくり 「友だちタイム」のB領域への位置づけ 6カ年に及ぶカリキュラム（目標・内容等）の試案検討・作成・実践（合計18実践） 実践をもとに教科書を作成
	<p>③ 各教科</p> <ul style="list-style-type: none"> 本校の3つの実践力と各教科の育成すべき資質・能力との関連・検討 3つの実践力を9つの力に細分化（主→現状把握力，論理的思考力，持続的行動力 協→洞察力，コミュニケーション力，適応力 創→発想力，表現力，活用力） 	<ul style="list-style-type: none"> 未来そうぞう科とのつながりを見出す。 教科の特性をいかして、それぞれの教科が3つの実践力へアプローチする。
評価に関する取り組み	<p>自由記述など</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どものワークシートや未来ノートの記述を抜粋。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どものワークシートや未来ノートの記述を抜粋。
	<p>心理尺度による評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 質問項目を62項目作成。来年度、実施予定。 	<ul style="list-style-type: none"> 62項目のアンケートを6月に実施。 心理学を専門としている大阪教育大学の教員と連携し、因子分析を行い、62項目から有効な項目を12項目として、11月にアンケート実施。
	<p>学習評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学年が目標を定め、パフォーマンス評価を行う。 校内研において、指導方法や教育課程について検討 	<ul style="list-style-type: none"> 実践力を発揮している子どもの姿から評価 発達段階を考慮し、未来ABC部会において、それぞれの領域ごとの資質・能力表の作成・改訂
	<p>総合的評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 運営指導委員会や各教科の外部評価がある中で、指導方法や教育過程について評価 授業研究発表会を公開し、外部教員から意見収集 	
成果	<p>○成果</p> <ul style="list-style-type: none"> OPDCA サイクルでカリキュラムの検討 各学年が3本ずつ単元を試案し実践 子どもや保護者からは「未来そうぞう科」について、肯定的な意見が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 資質・能力表の7回目の改訂を経て、目指す子ども像の共通理解が図られた。 7回における資質・能力表を改訂していく過程自体が子どもの具体的な姿を共有できる貴重な機会につながった。 教員が当事者意識を持ち、研究に取り組めている。 資質・能力表をもとに、単元ごとにルーブリックを作成しやすくなった。 書籍の発刊
	<p>▲課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 3つの実践力を発揮している具体的な子どもの姿の共通理解が不十分→資質・能力表の作成が必要である。 発達段階を踏まえた学習内容（対象）の検討が不十分 各教科のよって9つの力の言葉の定義が異なる。（例：洞察力，発想力，表現力など） 	<ul style="list-style-type: none"> 未来そうぞう科における教科書の是非→より柔軟なカリキュラムづくりが必要である。 創造的実践力の捉え方や見取り方に教員間で差異が見られる。→3つの実践力の構造化が必要である。 創造的実践力の評価方法に焦点化して研究していく必要がある。

項目	第3年次（平成30年）	第4年次（令和元年）
研究の経過	<p>① 研究組織</p> <p>各教科が本年度主に未来そうぞう科にアプローチしていく視点を「資質・能力」「イメージ・クリエイティブ」「教科横断的な学習」に焦点化し、「G教」を組織化した。</p>	<p>① 研究組織</p> <p>G教については、これまで共通点が少ない教科同士をグループ化していった。</p>
	<p>② 未来そうぞう科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未来をそうぞうする子ども像の改訂 ・未来そうぞう科の目標・見方・考え方の作成 ・創造的実践力の再定義 ・3つの実践力の構造化 ・A領域における系統的なカリキュラムづくり ・6カ年に及ぶカリキュラム（目標・内容等）の試案・検討・作成・実践（合計18実践） ・3つの実践力を高める多様な評価方法の用いた実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・創造的実践力→そうぞうの実践力へ ・未来そうぞう科の評価 6観点→3観点へ ・未来そうぞう科の評価の観点の運用 ・過去3年間の実践を踏まえ、子どもの実態や教育環境をもとに第4年次の計画カリキュラムの作成、実施 ・過去の実践における子どものモデレーション研修 ・研究全体会において、子どもの変容を語る機会を設ける。
	<p>③ 各教科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未来そうぞう科にアプローチしていく視点として、①「資質・能力」②「イメージ・クリエイティブ」③「教科横断的な学習」のいずれかに焦点化して、各教科が研究を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科がそうぞうの実践力を発揮している姿を想定 ・各教科が外部に向けて、授業公開。
評価に関する取り組み	<p>自由記述など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どものワークシートや未来ノートの記述を抜粋 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属中学校へ進学した卒業生の追跡調査。11月の教育研究発表会にて卒業生ブースを設け、参加者
	<p>心理尺度による評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成29年11月と平成30年の7月のアンケート結果を分析 ・協働的実践力と有意な得点の上昇、 ・創造的実践力は有意な得点の下降がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・12項目のアンケートを令和元年11月に実施。 ・主体的実践力が有意な得点の上昇が見られた。 ・協働的実践力は有意な得点の下降が見られた。
	<p>学習評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポートフォリオを用いて、評価を行う。 ・発達段階を考慮し、未来ABC部会において、それぞれの領域ごとの資質・能力表の作成・改訂 	<ul style="list-style-type: none"> ・未来そうぞう科の評価の3観点の運用・実施
	<p>総合的評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運営指導委員会や各教科の外部評価がある中で、指導方法や教育過程について評価 ・授業研究発表会を公開し、外部教員から意見収集 	
○ 成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 資質・能力表の15回目の改訂を経て、目指す子ども像の共通理解が図られた。 ○ 学習指導要領の試案の作成 ○ 書籍の発刊 ○ 3つの実践力の構造化に伴い、創造的実践力の評価方法の充実（自己評価をベースとしたEポートフォリオ、未来ノート、対話型評価） ○ A領域における発達段階を考慮した系統性のあるカリキュラムの作成 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新教科「未来そうぞう科」の学習指導要領の完成 ○ 書籍の発刊 ○ 自己評価力を高める手立ての充実（未来タイム） ○ 既存の教科が「そうぞうの実践力」を発揮している姿を想定し、実践を積み重ねる。 ○ 実施による効果の検証方法の多様化（教育研究会によるブースを設け、卒業生や保護者の生の声を発信する場の設定）
▲ 課題	<ul style="list-style-type: none"> ▲ 柔軟性と汎用性を兼ね備えたカリキュラムの作成 ▲ 他学校園とのさらなる連携 ▲ 自己評価を促す手立ての確立 ▲ 教科における未来そうぞう科の評価の運用 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ 「そうぞうの実践力」への焦点化 ▲ 「そうぞうの実践力」と新学習指導要領における資質・能力 ▲ 学校全体のカリキュラム・マネジメント ▲ 学びのプロセスの明確化 ▲ 自己評価力を高める評価

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1) 児童・生徒への効果

児童への効果については、①心理尺度による効果測定、②令和元年度、教育研究発表会における卒業生ブースの様子から検証を行う。

①心理尺度による効果測定

「主体的実践力」の下位尺度得点は、有意に高まった。これについては、子どもが、「ひとりで考え、ひとと考え、最後までやりぬく子」という本校教育目標のもと、「主体的」に考え、活動することの重要性をわかった上で、「未来そうぞう科」の学習に臨んだことにより、取り組み前よりも「主体的」に取り組む活動の場が増え、「主体的実践力」の向上を実感できたからだと推察される。

一方、「協働的実践力」「そうぞう的実践力」の下位尺度得点は、いずれも有意に低くなっていた。本研究開発における新教科「未来そうぞう科」の学習展開では、新教科設定前に比べて、異学年交流や様々な方々との交流、グループワークなどを行う機会が非常に多くなった。本研究の目標は、それらの様々な交流の機会を踏まえ、「協働的実践力」を高めることであるが、まずはそれらの場が多くなったことで、「協働的実践力」の必要性を感じる場も多くなり、「うまくいかなかったこと」「もう少しがんばったらよかったこと」ということを考える場も増え、児童の「協働的実践力」に対する見方がより洗練されたと言えるのではないだろうか。そのことにより、アンケートにおける下位尺度得点は、逆に低下したのではないかと推察される。「そうぞう的実践力」についても、同様に、これまで考えることのなかった様々な視点から広く社会や環境にアプローチする活動を行ったことで、「そうぞう的実践力」に対する児童自身の見方が厳しくなり、下位尺度得点が低下したと推察されることができると推察される。

② 卒業生の変容

「未来そうぞう科」を学習した子どもの変容を把握するため、教育研究発表会において、卒業生ブースを設置した。卒業生については、元担任で話し合った結果、印象の強いエピソードのある子どもに順番に依頼を行い、人数になると打ち切る形で声をかけ、9名の卒業生が参加した。以下は参会者と卒業生とのやり取りの抜粋である。

参会者：未来そうぞうの授業は好きでしたか？

卒業生 A：活動の中で解決するときの発想力がついていて感じている。好きなことをとことんできるから、とても好きだった。

参会者：協力することに関して未来そうぞうの力は生きていますか？

卒業生 D：中学では JOIN を通して「次はどうしようかな」と考える見通す力とか、友だちと話し合っ解決していく力とかは、未来そうぞうから繋がっている力だと思っています。

参会者：中学で行なっている JOIN につながっていますか？

卒業生 E：未来そうぞうを難しくしているような活動です。僕は、花粉症を生活リズムとか食生活でやわらげることについて、研究している。グループでも個人でもいい。自分でテーマを決めることからしている。



図 8 参会者との卒業生とのやり取り

子どもたちにとって新教科「未来そうぞう科」は価値のある教科であることや現在、中学校で行われている総合的な学習の時間（J O I N）での課題設定や、解決過程における様々な力に生きていくこと、などが明らかとなった。

2) 教師への効果

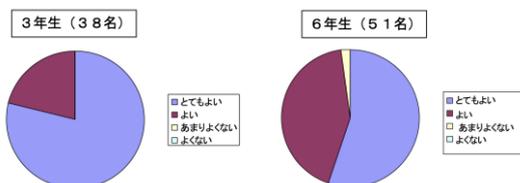
本研究では、「未来を『そうぞう』する子ども」を育むために、教科や領域が異なっても、子どもにも「主体的実践力」「協働的実践力」「そうぞう的実践力」を育成するという視点が軸にあるため、子どもの見取りが共有しやすくなった。また、どの学習場面においても、教員全体で3つの実践力の育成を意識してめざす子ども像を共有し、カリキュラム・マネジメントすることや手立てを打つことなど、

学校全体での一貫した教育活動が可能となった。また、子どもの変容が見られることにより、教員が充実感を得られている。教員間での「未来そうぞう科」に関わる話題が増え、新たなカリキュラムやアイデアの提案が積極的に行われている。

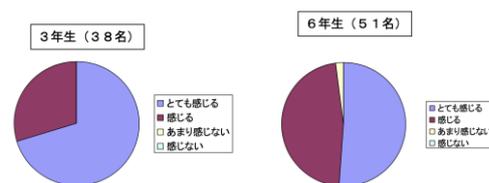
3) 保護者への効果

新教科「未来そうぞう科」の授業に、参画した保護者の中で、6年間のゴールとなる6年生と、中間地点を迎える3年生にアンケート調査を行った。以下はアンケートの結果である。

1. 未来そうぞう科についてどう思いますか



2. 未来そうぞう科の学習はお子様の成長につながっていると感じられますか



4) 外部からの評価

令和元年度11月9日の教育研究発表会（中間発表）において、参画された方々の声を一部抜粋する。

未来そうぞうの学習について

- ・ 学び方を学ぶことで、他教科への学び方の広がりを目指すことで研究の価値が上がる。
 - ・ どんな児童を育てたいかというねらいが明確であり、自身の教育にも取り入れたい考え方であると思った。
- ▼ 総合との違いがわからなかった。

未来そうぞうと各教科との関係について

- ・ 教育において、未来そうぞうは中心・核になる部分だと思うので、未来そうぞうを中心に各教科について学べるところがよい。
 - ・ 教科の中で生まれた発展的な課題が、未来そうぞうに繋がったり、逆に未来そうぞうで培われた資・能力が教科に繋がったりするのではないかな。
 - ・ 机の上での学習だけでなく、自分で見て思ったことや考えたことを共有し、他者の意見も聞いて学習するということができているのかなと思った。
- ▼ 全ての教科に通ずる考え方かと言われれば微妙なところがあるものの、これから改善の余地は十分にあると思われる。
- ▼ 授業の中での想像と創造をどのように捉えているのか、見るとよい。
- ▼ 未来そうぞうの色合いが強すぎるのでは。未来そうぞうをしっかりと確立するために、各教科がしっかりとしていないといけないのではないかなと思う。
- ▼ (算数を参観したが) 生活科かと思った。

その他 (全体を通して)

- ・ 卒業生が自分の成長を自ら語る姿が印象的だった。
- ・ 教科同士や教科と未来そうぞう科のコラボレーションがよいと感じられました。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

教育課程においては①「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な「そうぞう的实践力」への焦点化、②「そうぞう的实践力」と新学習指導要領における資質・能力との関係性について、③新教科「未来そうぞう科」を核としたカリキュラム・マネジメントの必要性の3点について、課題が見られる。

指導方法等においては①学びのプロセスの明確化②自己評価力を高める 新教科「未来そうぞう科」における評価の2点について、課題が見られる。

大阪教育大学附属平野小学校 教育課程表（令和元年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的学習の時間	特別活動	新教科「未来そうそう科」	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	306	/	136	/	0 (-102)	68	68	/	102	34	/	/	0 (-34)	136 (+136)	850 (0)
第2学年	315	/	175	/	0 (-105)	70	70	/	105	35	/	/	0 (-35)	140 (+140)	910 (0)
第3学年	245	70	175	90	/	60	60	/	105	35	/	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	945 (0)
第4学年	245	90	175	105	/	60	60	/	105	35	/	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	980 (0)
第5学年	175	100	175	105	/	50	50	60	90	35	35	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	980 (0)
第6学年	175	105	175	105	/	50	50	55	90	35	35	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	980 (0)
計	1461 (0)	365 (0)	1011 (0)	405 (0)	0 (-207)	358 (0)	358 (0)	115 (0)	597 (0)	209 (0)	70 (0)	0 (-280)	0 (-209)	696 (+696)	5645 (0)

学校等の概要

1 学校名, 校長名

オオサカキョウイクダイガクフソクヒラノショウガッコウ
大阪教育大学附属平野小学校

校長 出野 卓也

2 所在地, 電話番号, FAX番号

所在地 大阪府大阪市平野区流町1-6-41

電話番号 06(6709)1230

ファクシミリ番号 06(6709)2839

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数, 学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
103	3	104	3	104	3	104	3	105	3	104	3	625	18

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1
講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計				
4	1	1	2	0	31				

5 研究歴

昭和46年度～昭和62年度 新しい基礎学力観とそれに基づく授業づくり

文部省研究指定校「ゆとりあるしかも充実した教育のための教育課程」(昭和50～51年度)

昭和63年度～平成7年度 自己を発揮し、自ら変容する子ども

平成8年度～平成13年度 豊かな人間性を育む教育課程の創造

平成14年度～平成19年度 確かな学びを創り出す学校

平成20年度～平成21年度 平野で育つ学び続ける子ども

平成22年度～平成24年度 学び合い活動を通して個の考える力を育てる授業づくり

平成25年度～平成27年度 学びを創り続ける子どもの育成

平成28年度～ 未来を「そうぞう」する子ども

◎研究開発としての研究歴

平成25年度

文部科学省 インクルーシブ教育システム構築モデル事業

(平野五校園：主体は大阪教育大学附属特別支援学校)